

足関節捻挫がパフォーマンスに与える影響 ～ラグビー選手における検討～

京都大学医学部附属病院 理学療法部
西村 純(PT), 長谷川 聡(PT), 南角 学(PT)
京都大学医学部保健学科
市橋 則明(PT)
京都大学医学部整形外科
中川 泰彰(MD), 中村 孝志(MD)

【目的】本研究の目的は、ラグビー選手において、足関節捻挫受傷が競技復帰後の運動能力に及ぼす影響を明らかにすることである。

【方法】対象は大学ラグビー部に所属する 33 名とした。1 シーズンでの足関節捻挫の有無を調査し、捻挫受傷後、受傷日以降に練習もしくは試合を休む必要のあったものを捻挫群(3 名)とし、受傷しなかったものを非捻挫群(30 名)と分類した。シーズン終了時、運動能力測定を行った。測定時、足関節捻挫を受傷した全選手が競技復帰を果たしていた。運動能力測定の種目は、フィールドテストおよびバランステストとした。フィールドテストは片脚での Side Hop、6m Hop、垂直跳び、幅跳び、3 段跳びとした。バランステストは重心動揺計を用い、開眼片脚立位での総軌跡長を測定した。両群の平均値の比較を行った。

【結果】フィールドテストは、Side Hop では、捻挫群は非捻挫群と比較して 16.6%高い値を示し、捻挫群では側方への敏捷性の低下が認められた。一方、6m Hop、垂直跳び、幅跳び、3 段跳びでは捻挫群は非捻挫群に比べて大きな差はみられなかった。バランステストは、開眼片脚立位での捻挫群の総軌跡長は非捻挫群より 22.3%高い値を示し、片脚立位でのバランス能力の低下を認めた。足関節捻挫を受傷後、競技復帰を果たした選手の中には、前方への敏捷性やジャンプ能力に大きな差がなくても、バランス能力や側方の敏捷性が低下していることが示唆された。